

機関番号：14302
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21820019
 研究課題名（和文） ブロンテ文学翻案作品研究

研究課題名（英文） Studies in Brontë Adaptations

研究代表者

奥村 真紀 (OKUMURA MAKI)
 京都教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：70515098

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代の批評動向を踏まえた上で、ブロンテ姉妹の作品の文化史・社会史的な位置づけを再検証するために、個々の小説の何がどのように異なる文化の中で受容されてきたかを明らかにすることを目的とした。具体的には19世紀から21世紀にかけての *Jane Eyre*、*Wuthering Heights* の舞台化、映画化、テレビドラマ作品の代表的なものを検証し、学会発表、講演、学会誌への投稿を通じて作品を文化的受容史の中でとらえなおす試みを行った。

研究成果の概要（英文）：This study investigates into the various adaptations of the works of Brontë sisters for the purpose of examining and clarifying how the “meaning” of each literary text has been produced in the different cultural and social contexts. Some famous and important adaptations, both dramatization and filmization, of *Jane Eyre* and *Wuthering Heights* are examined in this study, and the papers on them were read in conferences and are published in a journal.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	960,000	288,000	1,248,000
2010年度	820,000	246,000	1,066,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,780,000	534,000	2,314,000

研究分野：英文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学、ヴィクトリア朝小説、翻案劇、舞台化、映像化、メロドラマ

1. 研究開始当初の背景

文学研究の分野では、長きにわたって、ハイカルチャーである原作に対し、その翻案である舞台や映画は、＜大衆＞の好みに迎合したいわばローカルチャーであり副次的産物であるとみなされ、系統だった研究がなされてこなかった。しかし、特に1990年代以降、

いわゆる文芸映画やテレビドラマが数多く作られ、19世紀小説の翻案が映像というメディアのコンテンツとして大いに注目されるようになってきた。それに伴って、19世紀小説の翻案作品は文化研究として重要な視点を提供すると考えられるようになった。

21世紀の今、ヴィクトリア朝小説あるいはヴィクトリア朝英国そのものが、一つの文化

的アイコンとなって商品価値を持ち、さまざまな形で再生産されていることが本研究の背景にある。特に 19 世紀英国の女性作家たちの作品群が近年、顕著に映画化、舞台化されているという事実を踏まえると、文学作品がいかに文化的に翻訳され、それがどのように受容されているかを検証することは、ヴィクトリア朝文化研究と文学作品研究の両方の分野において新しい視点を与える試みになると考えたことがこの研究の背景になっている。

2. 研究の目的

本研究は、単なる作家研究ではなく、ブロンテ姉妹の作品が時代や国を超えてどのように翻案され、受容されてきたかを探求し、その作品の再生産のプロセスを追うことによって、作品論の枠組みを超えて、文学研究を文化史的枠組みの中でとらえなおすことを目標としている。

ブロンテ姉妹の研究では例えば Patsy Stoneman が姉妹の小説の翻案作品を紹介する本を 1996 年に出版するなど、作品の受容史に対する関心は高まってきている。ただし、Stoneman の試みは画期的であるものの、すべての翻案の事実を網羅することにとどまり、個々の翻案作品を詳細に分析するところまで至っていない。もちろん、純文学作品として文学史上重要視されてきた原作を検証することの必要性は言うまでもないが、翻案作品がこれほど多く再生産されている事実を考えると、また、一般的に現代文化のなかではむしろ映画や舞台のような翻案作品自体の方が、小説それ自体よりも多く流通している事実を考えると、この翻案作品それ自体、ひいては翻案作品の受容のされ方自体にこそ原作である文学作品の意味が存在すると考えられる。

本研究では、個々の翻案作品が、原作の何をどのように解釈し、取り上げているかを詳細に分析することによって、それぞれの時代や文化が同じ作品の何に「意味」を見出し、強調しているかを探ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、伝統的な英国小説研究の手法に基づき、さらに視野を広げて進めるものである。研究を始める前にすでにブロンテ姉妹の代表的な文学作品の精読および分析は進めており、各作品のテキスト分析に基づいて、19 世紀、20 世紀の翻案作品について、翻案劇の台本、映画やテレビドラマの映像を入手、分析することを進めた。具体的には、1996 年に出版された Patsy Stoneman, *Brontë Transformations: the Cultural*

Disemination of Jane Eyre and Wuthering Heights の巻末にある表を参考にして、翻案劇や映像作品の特定と、調査・収集先などの選定を行った。インターネットでのカタログ調査に加え、各国の学芸員や図書館司書の助けを借りながら、イギリス、アメリカ両国の図書館、並びに大学などの研究機関に資料収集、調査におもむき、重要な翻案劇や映像資料の特定を進めた。同時に劇評や、最近のものであればプロダクション・ノートなどを調査、参照し、原作との比較分析、また各国での受容のされ方について、比較分析を行った。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究は、作家としてのブロンテ姉妹の作品論にとどまらず、小説作品の意味を、逆説的に社会・文化史的な文脈から検証することを目標として進められた。19 世紀の出版直後から 21 世紀の現代にいたるまで、ブロンテ姉妹の名は英文学の主流に組み込まれ、彼女たちの作品テキストは、純文学史上重要であるとみなされてきた。その視点を保った上で、本研究は文学作品の「意味」を拡張し、テキスト自体から解放し、広く文化の中でその「意味」がどのように生み出され、受容されてきたかを検証した。

平成 21 年度は、平成 20 年度までに行った *Jane Eyre* についての翻案研究を推進することを目標とした。1847 年に出版されたこの小説は、出版直後から舞台として翻案され、いくつもの舞台や映画を生み出しているが、まずは 2006 年に舞台化された Polly Teale の翻案劇 *Jane Eyre* と BBC のテレビドラマ *Jane Eyre* (2006) の比較を行ったことに基づいて、時代をさかのぼることから研究を進めた。

具体的には、20 世紀にもっとも多く上演された翻案劇である Helen Jerome の *Jane Eyre* を取り上げ、検証、分析した。ジェロームの脚本はイギリスで初上演された後、アメリカに渡り、1980 年代までくりかえし上演されている。その特徴は、きわめて保守的で女性らしいヒロインの造形にあり、原作にあるラディカルなフェミニズム的側面はそのヒロイン像にはまったく見られない。原作の抱える女性の立場への不満を考えると、この翻案は現代の批評家にとってはやや物足りないものに思えるが、このジェロームの脚本は、実際には国や時代を変えながら何度も繰り返し舞台化されている人気のある舞台であったのである。

一見女性らしく保守的なヒロインを持つこの作品は、メロドラマというキーワードで分析することによって、原作の持つラディカ

ルさを逆説的に体现するものとなる。女性が主な観客となるこのジャンルにおいては、通常の舞台化に見られるような、男性による女性の客体化という権力闘争は巧妙に回避されている。そしてそれは、原作の中で奇妙に肉体を欠いた存在であるヒロイン、ジェインに肉体を与えるというねじれた試みでありながら、最後にロチェスターが視力を失うことでジェインを手に入れるという原作のプロットが潜む意味を明らかにしている。つまり、一見保守的に原作の意味を歪曲したように見えるこの脚本は、実際には原作の持つ、男性のまなざしによる女性の客体化へのひそかな抵抗を、舞台の上で逆手にとって再現するという隠れた意図を持ち、それが 20 世紀に広く受け入れられたということである。このように、本研究においては、家父長制に強く抗議したラディカルな原作のヒロインが、20 世紀の、もはやフェミニズムが斬新でなくなった時代の舞台において、一見保守的に姿を変えつつ、逆説的に原作の主張を見事に表現していることを論証した。

また、文学研究とその翻案作品研究で得られた知見を一般的に大学教育の場で活用することを旨とし、平成 21 年度には、JACET (大学英語教育学会) 関西支部の講演会において、小説 *Jane Eyre* を用いた授業についての講演を行った。21 世紀の現在、ヴィクトリア朝のものに対する関心やメディアのニーズの高まりとともに、*Jane Eyre* の映画やテレビドラマが作成されていることは、この作品が現代に通じるテーマを持つということも裏付けている。実際、授業で *Jane Eyre* を扱う際に、まずはそのプロットの面白さに学生は引き込まれたが、物語のみならず視点の問題や時代背景、文化知識などに学生の眼を向けるために、翻案作品である映画やテレビドラマの使用は大変効果があった。このように、研究の場で培った知見を実際の教育の場で活かすということにも積極的に取り組んだことは、当初の研究計画以上の成果であると言える。

平成 22 年度は、まず、平成 21 年度に行ったジェロームの *Jane Eyre* とメロドラマとの関連性についての研究をまとめ、論文として発表し、並行して 19 世紀の *Jane Eyre* の舞台についての研究を進めた。

同時に、*Jane Eyre* と並ぶ姉妹の代表作である *Wuthering Heights* の翻案作品研究にも着手した。まずは日本ブロンテ協会主催の講演会において、*Wuthering Heights* の映像化についての講演を行った。『嵐が丘』と聞いて誰もが思い浮かべる、荒野にふたりきりでたたずむ孤高の恋人たちというイメージは、実際にはロックウッドとネリーというふたりの語り手を持つ原作においては奇妙に欠

落している。その原作に欠落している自然、そして大自然のなかに立つ恋人たちというイメージが形成されていく過程を、1939 年、1992 年の映画作品、そして 2009 年のイギリス ITV 制作のテレビドラマという 3 本の映像作品を比較・分析することで検証を試みた。それによって、1939 年の映画版がいかにそのヒルトップ・ラヴァーズのイメージを作り上げたかを論証し、第二次世界大戦へと向かう時代の暗さが、ロマンチックな作品解釈の中に人々の現実逃避願望をうまく受け止めたことを始め、それぞれの時代が『嵐が丘』の意味をどこに求めてきたかを分析した。

また、逆に、映像化から得た視点を作品論に還元し、学会発表によって原作の考察を深めた。同時に原作と翻案作品の比較によって、『嵐が丘』の映画作品がいかに、原作に欠落する自然を作者の天才性や想像力と同一視し、ブロンテ神話を作り上げることに貢献してきたかを論証した。

また、前年度と同じく、小説作品の精読に映像化作品を効果的に用いた大学での授業のあり方を模索し、実践を試みた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけ

本研究の成果は、研究者を対象にして、平成 21 年度に、*Jane Eyre* の翻案作品研究について、日本ブロンテ協会での学会発表として公開し、その後、平成 22 年度に学会誌に論文の形で発表した。

また、ブロンテ姉妹は愛好家も多く、日本ブロンテ協会が主催する公開講座などへの一般の参加者も多い。平成 22 年度には一般愛好家へ向けて、日本ブロンテ協会主催の講演会において、*Wuthering Heights* の翻案作品についての講演を行った。その原稿は、論文集として出版する予定である。

さらに、大学教員としての立場から、翻案作品研究で得られた知見を授業で還元するべく、原作の精読のための効果的な映像資料の使い方を模索し、実践していることも本研究の成果の一つとしてあげることができる。

(3) 今後の展望

本研究は、21 世紀の現在、19 世紀ヴィクトリア朝が一つのアイコンとして商品価値を持つにいたったその過程を、個々の舞台化、映画化作品を綿密に検証することを通して明らかにすることが目的であり、ブロンテ姉妹の代表作である *Jane Eyre* と *Wuthering Heights* については、代表的な翻案作品を検証、分析することができた。しかし、ブロンテ姉妹の翻案作品はその人気を反映して非常に多く、まだ検証が終わっていない作品もあるので、それについて順次分析、研究を進める必要がある。また、数は少ないものの、

Jane Eyre, *Wuthering Heights* 以外の作品についても翻案作品は存在するので、それについても研究を進める必要がある。

さらに、ヴィクトリア朝研究という視点からは、上述のように、翻案作品が原作の解釈のみならず、ブロンテ姉妹のイメージを神話的に構築していることが考察された。また、ブロンテ姉妹については伝記映画も数点制作されており、いかに姉妹が文化的アイコンとして機能していくかについての研究に広げていく必要もある。

また、上述の通り、文学作品並びに翻案作品研究で得た知見を大学教育に還元していくための実践についてもあわせて、今後の研究課題とする必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 奥村真紀、 “Search for the Ultimate Real: the Collapse of Narrative in Charlotte Brontë’s *Shirley*”、『京都教育大学紀要』、査読有、第118号、2011、53～64.
- ② 奥村真紀、 “The Pleasure of Reading: A Practice Report upon Intensive Reading of a Victorian Literary Text”、『文学教育研究』、査読有、第3号、2010、pp. 40～49.
- ③ 奥村真紀、「書きなおされる *Jane Eyre* 一舞台化作品とメロドラマ」、『ブロンテ・スタディーズ』、査読有、第5巻第2号、2010、pp. 1～14.

〔学会発表〕(計5件)

- ① 奥村真紀、「『嵐が丘』における語りと沈黙」、日本ブロンテ協会関西支部春季大会、2011年3月26日、近畿大学.
- ② 奥村真紀、「味読の楽しみ：小説の原典を使った精読の試み」、JACET (大学英語教育学会) 関西支部文学教育研究会、2010年12月18日、同志社大学.
- ③ 奥村真紀、「『嵐が丘』と自然：映像で見るヒース」、日本ブロンテ協会主催 ブロンテ・デイ講演会、2010年6月6日、横浜バラクライングリッシュガーデン.
- ④ 奥村真紀、「書きなおされる『ジェイン・エア』一舞台化作品を読む」、日本ブロンテ協会 2009年全国大会、2009年10月17日、横浜市立大学.
- ⑤ 奥村真紀、他3名、「英語教育における文学教材の可能性」、JACET (大学英語教育学会) 関西支部講演会、2009年7月25日、キャンパスプラザ京都.

〔図書〕(計3件)

- ① 内田能嗣編、奥村真紀他著、ミネルヴァ書房、『ブロンテ姉妹の世界』、2010、329頁.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥村 真紀 (OKUMURA MAKI)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70515098